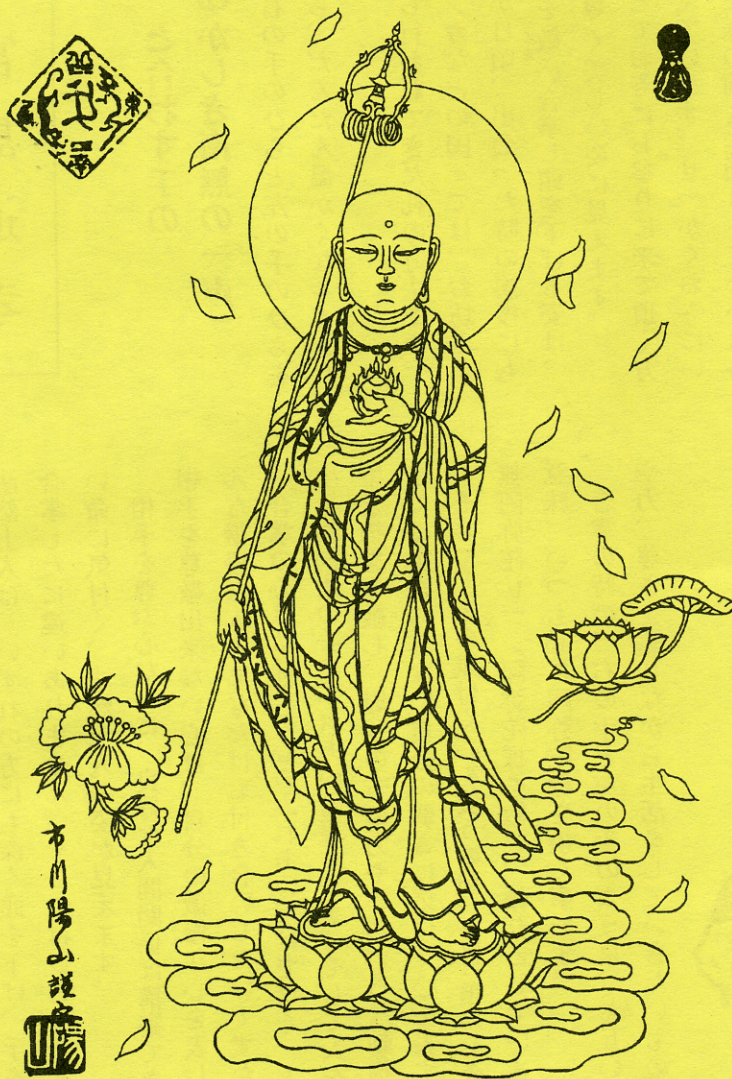


みおしえ



共に和する

地藏菩薩

合掌の心

大龍寺 宮島道孝

「みぎ 佛

ひだり 衆生 と合わす手の

中にゆかしき南無の「一声」

指をしっかりと伸ばして、右の手のひらと左の手のひらをあわせてみて下さい。ほうら、だんだん温かくなってきてでしょう。

合掌は、インドで古くから行われてきた礼の方法です。インド、ネパール、スリランカなどの国々では、お坊さんに対してだけでなく、人々が日頃、出会った時の挨拶にも合掌するそうです。人が仏様を敬い合掌し頭を下げる姿は、ただその姿だけで、本当に尊く美しい姿に見えます。

ところが今、お墓参りなどでお寺にお参りに来て頂く方で、合掌の出来ない方が増えています。せっかくお寺にいらしているのに本堂の阿弥陀様の前を素通りしていかれる方や、阿弥陀様にお尻を向けたまま話し込んでおられる方を多く見かけるようになりました。

そうした方は、仏様がそこにいらっしやることに気付いていない方だと思えます。仏様という特別の存在の尊さに

気付かない方は、おそらく、自分のまわりに存在している人々の尊さにも気付かないのだと思います。

浄土宗の宗祖、法然上人は、老若男女、遺族、あるいは悪人と言われた盗賊にも、わけ隔てなく法を説かれました。法然上人は、いずれの方にも深く頭を下げ、手を合わせ、合掌したに違いありません。そこにはひとり一人の中の尊い命に気付く、法然上人の姿が見えます。

相手を尊ぶ心なしに、良好な人間関係は構築できません。相手を尊敬出来ない心は、自分の傲慢な心を表します。そんな傲慢な人とあなたは付き合い合いたいですか？

合掌の心は仏様との心のふれあいだけでなく、人間同士、生き物同士の心のふれあいも表します。そして人を尊敬し、生き物を尊敬し、周りの方の力やいろいろな動物、植物などでは生きられない自分の弱さに気付く心を表すのです。

そして、その気付く心を養うのが、常日頃のお念仏、「南無阿弥陀仏」（阿弥陀様を敬い、頼りとしていきます。の意味）いつも心に阿弥陀様を頂く事です。

合掌の時の、右の手と左の手のように、お互いの温もりや力、尊さを感じながら生活をしていきたいものです。



病と和す

先光寺 小川寧山

先光寺というお寺を、皆さんきつとご存知ないでしょう。

埼玉県で一番新しい一四六番目の浄土宗寺院です。平成十二年の十二月に浄土宗務庁や埼玉教区のお力添えで、やっとできた外見も中身もお寺らしくないお寺です。

こんな小さな力不足のお寺なので、昨年十二月家内も資格を取るために、増上寺で加行を受けました。今年の七月には、国内開教と海外開教を比べ、国内開教のヒントを得るために、浄土宗ハワイセミナーに家内を行かせました。ハワイの開教の地では、地縁・血縁による縛りがないので、近くにお寺があると宗派にこだわらずに入信されます。その代わりお寺の活動が熱心でないと簡単に離れて行かれます。この状況は、壇家ゼロからスタートした私どもと同じだと気付きました。とにかく地域に根付き、家族で協力して今日までやってきて、やっと、一年半です。

そんな折、今年の八月十五日のお盆、私の四十六回目と家内の四十三回目の誕生日でもありますが、生まれて初めて手術を受けました。十四日に入院する前の日までお盆も何軒も回るところがないので、円心寺のお手伝いで、自転車をこいで柵経に回っていました。病氣の内容も医者の話

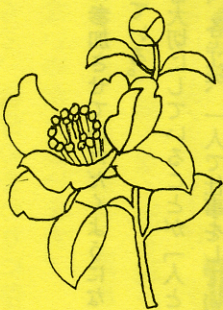
をボーッと聞いていただけなのでよくわからず、すぐ退院できると思い、箸を洗うのも面倒とばかり不届きにも割り箸で済ませようなどと考えていました。それまでは、入院はもちろん、点滴一つしたこともありませんでした。葬儀や法要でお勤めする時に、いつも死というものと向き合ってきましたが、自分のこととしてどれだけ考えていたのでしょうか。病名は、精巣ガンでした。日本ではとても珍しいガンで、年間千人ほどしか罹らないそうです。

信徒の方たちに法話をする時は、まさか自分がガンになるとはゆめゆめ思わかったことに気付きました。いつも偉そうなことを言っていたのでしょうか。自問自答しました。恥ずかしいことです。人並みに病を得て、やっと遺族の方々の悲しみを少しは共に分かち合えるように思います。

幸い手術も無事に済み、翌日の朝からお腹は減るし、退屈だし、点滴をぶら下げふらふらと歩き回っていました。

「病と和す」とはおかしな言葉ですが、病もまた自分の人生のかけがえのない一部として、病氣と仲良く生きていきたいものです。

おかげさまで今はまた何事もなかったかのように生活できる毎日です。



方便（ほうべん）

「嘘も方便」と言われます。嘘はどんなことがあっても嘘に違いないはずですが、それが「方便」としてまかり通るということは、どういうことでしょうか？

「方便」という言葉は仏教語のウパーヤであり「近づく・到達する」という動詞から生じ「方法・てだて・工夫」を意味します。すなわちそれは、真実に裏づけられて真実の世界へと導く「てだて」であり、端的には衆生を真実の教えへと導くために仮説した法門のことです。

私たちの慌ただしい生活のなかで、自分自身を反省する機会が少なくなりました。そんな時、ゆっくりと経典を読むと、身近に迫ってくる言葉にハッとすることがあります。経典では、それが比喻によって説かれ、真実なる目的へと「近づき・到達する」てだてが見事に用いられています。このように、目的に向かって近づいていく、その歩みこそが「方便」の意味するところなのです

【編集後記】

◇ 私が青年会の活動に参加させていただくようになってから、早十年が経とうとしている。

この会の中で私が一番大切にしていることが「人と人の繋がり」である。僧侶は普段、各寺院、一人で仕事をしている。しかし一人というのは怖いものである。それはなぜか、自己流、自分本位になってしまいがちであるからだ。この会には多くの会員が在籍している。意見交換、情報交換などをする中で、一人では気付かなかったこと、見えなかったことを確認することができる。

人と人が集い、「和」をつくる。なんとすばらしいことだろう。人間一人では生きて行けないのだから……。

◇ 今回は宮島道孝・小川寧山両上人に原稿の執筆をお願いした。お二人には改めて感謝申し上げたい。

〒三六二一〇〇四七

埼玉県上尾市今泉一五六 十連寺内

『みおしえ』編集室 代表 宇高 康哲